

表現運動の「イメージカルタ」における 文字の描き方に関する検討 —通常文字・オノマトペ強調文字の効果を比較して—

七澤朱音¹⁾*・永末大輔²⁾

¹⁾千葉大学教育学部

²⁾千葉大学教育学部附属小学校

An Examination of How to Draw Characters in “Image Carta” in an Expressive units

—A Comparison of the Effects of Normal and Onomatopoeia-Enhanced Characters—

NANASAWA Akane¹⁾* and NAGASUE Daisuke²⁾

¹⁾Faculty of education, Chiba University, Japan

²⁾Elementary School Attached to the Faculty of Education, Chiba University

表現運動における表現の授業で、「イメージカルタ」に単元の題材（絵・題材と状態を示すオノマトペ）を描いて即興表現に用いることは、題材のイメージを抱きにくい児童や表現運動の授業を苦手とする教師にとって有用とされる。しかし、その「イメージカルタ」に記載する“文字の描き方”に関してはこれまで議論されてこなかった。よって本研究では、「イメージカルタ」に記載するオノマトペを、装飾せずに文字情報として記載する「A通常文字」と、装飾して題材の状態を強調する「Bオノマトペ強調文字」の二つに分け、“文字の描き方”が与える影響について検討することにした。対象は、令和3年10月にC大学で表現運動の授業を履修した三年次生28名と、C小学校第四学年児童35名（技能上位6名、中位・下位29名）とした。全ての授業実践終了後に、全てのイメージカルタの写真に対して「Q：即興表現でイメージカルタを用いる際に、このカルタは表現しやすいと思いますか」と質問し、五段階で回答を求めた。結果、C大学三年次生とC小学校技能上位6名においては、②の方が有意に表現しやすいと評価した。一方、同小学校技能中位・下位の児童においては①と②の評価に差異が認められなかった。

In Expressive Activity classes, drawing the image of the unit (pictures, onomatopoeia indicating the subject and its state) on an 'Image Carta' for improvisation is considered useful for children who have difficulty in imagining and for teachers who are not good at Expressive Activity classes. However, “how to draw letters” in the 'Image Carta' has not been discussed so far. Therefore, in this study, the onomatopoeia in the 'Image Carta' is divided into two types: (1) 'A normal characters' that are written without decoration and (2) 'B characters that emphasize onomatopoeia' that are decorated to emphasize the state of the image, and we decided to examine the influence of the “way of drawing letters”. The subjects were 28 third-year students who took an expressive movement class at the University of C in October 2021, and 35 fourth-grade students (6 in the top technical level and 29 in the middle or lower level) at the C Elementary School. After all the classes were completed, the students were asked Q: Do you think this 'Image Carta' is easy to express when you use it for improvisation? The results showed that the third-year students at University C and the six students with the highest skills at Elementary School C rated 2 as significantly easier to express. On the other hand, there was no difference in the ratings of 1 and 2 among the students in the middle and lower proficiency levels at the same elementary school.

キーワード：表現運動 (Expressive Activity), 即興 (Improvisation), イメージカルタ (Image Carta),
オノマトペ (onomatopoeia)

I 緒 言

小学校学習指導要領体育編の「表現運動系」は、「自己の心身を解き放して、イメージやリズムの世界に没入してなりきって踊る」ことができる運動であり、その中

の「表現」は特に「身近な生活などから題材を選んで表現したいイメージや思いを表現するのが楽しい運動」であるとされる（文部科学省，2019）。この「表現」の学習では、児童たちが題材の特徴を明確にとらえて、そのイメージを全身で表現することが求められる。よって、児童たちが題材のイメージをより豊かに抱き、身体表現に楽しさを感じられるように様々な指導の手立てが必要と

*連絡先著者：七澤朱音 a-nanasawa@faculty.chiba-u.jp

表1 スポーツオノマトペの種類(吉川, 2013)

【促音 (ッ)】	スピード, 動きの流れ, 動きのつながりが伴う表現
【撥音 (ン)】	パワーが伴うダイナミックな動作や大きな動作の表現
【語尾に「リ」】	ゆっくりした回転, 柔らかい動作を伴う動作
【長音 (ー)】	パワーの持続状態, 動きの距離感の表現
【反復】	動作の協調, 動作のリズムやタイミングの表現

※筆者による作表

される。

「イメージカルタ」とは、「イメージバスケット」を具体化する教具であり、題材のイメージを描いて即興表現に用いる。床にちりばめられた「イメージカルタ」を、複数名(2～4名)で次々にめくっていき、書かれている場面からイメージを広げ思いつくままに踊る。そして、気に入った場面を元に簡単なお話をつくり、動きの工夫も加えてひと流れの動きで踊っていく(畝木, 2009)。カルタには、表面のみに、題材名(A)とその状態を表す言葉(B)、関連したイラストと擬音語・擬態語(オノマトペ)(C)が描かれている。例えば、クラゲが題材であった場合、「ふわふわ(C)泳ぐ(B)クラゲさん(A)」のように、文字を書き、クラゲのイラストを描く。作品づくりの手がかりとなるイメージを児童たちに与えることが可能であり、実際に授業で「イメージカルタ」を活用している教師の感想として、体育が専門ではない教員や踊れない教員でも可能な指導方法である(寺山, 2011)、と紹介されているように、ダンスや表現運動の授業が苦手な教師にとっても効果的な教具であると考えられる。

この「イメージカルタ」に記載されるオノマトペに関しては、様々な先行研究が存在する。例えば、スポーツ場面でも広く使われている「スポーツオノマトペ」は、速さや強さ、持続時間などの運動感覚を身につける際に効果的だとされ、五種類が類型化されている(吉川, 2013, 表1)。

他にも、こういったオノマトペを、紙面の中に巧みに表現している例としてマンガがある。マンガには、絵のみでなく文字も多用され、擬態語・擬音語の総称であるオノマトペは、一般語彙に比べ臨場感に溢れ繊細な表現ができ、場面の雰囲気や人物の心象をより強く読者に伝えることができるとされている(遠藤ら, 2018)。その際に、尖らせたり太くしたりする等して文字の描き方を変えオノマトペを強調して描くことにより、マンガの世界観への没入や読者の感情移入を誘う。このオノマトペは、イメージと直結する感覚的な強い表現力を持っており(森本, 2017)、物事を直接的・感覚的に描写し、自分のとらえた感覚を直接的に表現しようとする個性的かつ創作的なものであるとされている(中里, 2005)。

オノマトペが持つこれらの効果を、教師が意図して「イメージカルタ」に用いれば、表現運動の授業でより豊かな即興表現を引き出すことが可能になるのではないかと考える。しかし、このオノマトペを「イメージカルタ」上の文字情報として“どのように描けば良いのか”という議論はこれまでなされてこなかった。この疑問を検証

するために、「イメージカルタ」へのオノマトペの描き方を変化させ、通常の文字の描き方のカルタと先のマンガの紙面で使われる描き方のカルタを同時に活用することにより、文字の描き方が与える効果について比較することとした。

II 研究方法

1. 対象と期日

C大学教育学部の選択必修科目である「身体と動きⅡ(令和3年10月5日～11月16日)」の前半7回(表現運動・ダンス)を履修した受講生(3年次28名)と、令和4年3月3日・11日に「表現運動」の授業を実施したC小学校第4学年の一クラスの児童(35名)を対象とした。

2. カルタの製作

「身体と動きⅡ」の受講生たちは、海の生き物というテーマで一人一つの題材、計二枚の「イメージカルタ」を製作した。そのうちの一枚目は、文字を装飾せずにオノマトペを文字情報としてのみ記載する「A通常の文字」を、二枚目は装飾して題材の状態(擬音語・擬態語)を強調する「Bオノマトペ強調文字^{注1)}」を描いた(図1)。この「身体と動きⅡ」の授業で製作・活用したカルタは計56枚(28個の題材×二種類の異なる文字の描き方)であったが、その中からイラストや文字が正確に描かれた計44枚(22個の題材×二種類の文字の描き方)のカルタを、C小学校の授業実践に用いた。

3. 単元計画・実践

C大学における「身体と動きⅡ」は、フォークダンスの学習から始まり、「イメージカルタ」の製作と即興表現における活用の後、グループ作品創作へと展開した。最終回は、「海の世界」というテーマで作品発表会を行った。

C小学校の単元は、「表現」のみ全2単位時間であった。「身体と動きⅡ」の受講生たちが描いたカルタにある生き物の静止画と生態を筆者がパワーポイントに入れて、実技の授業前に児童たちに視聴させた。それにより、もし児童たちが知らない海の生き物カルタに出会っても、イメージを広げて具体的な動きにつなげられるように意図した。カルタを用いて即興表現を学習した後は、5～6名の小グループで作品創作を行い、ミニ作品発表会を実施した。

4. データ収集方法

受講生・児童ともに、授業終了後にGoogle formを用

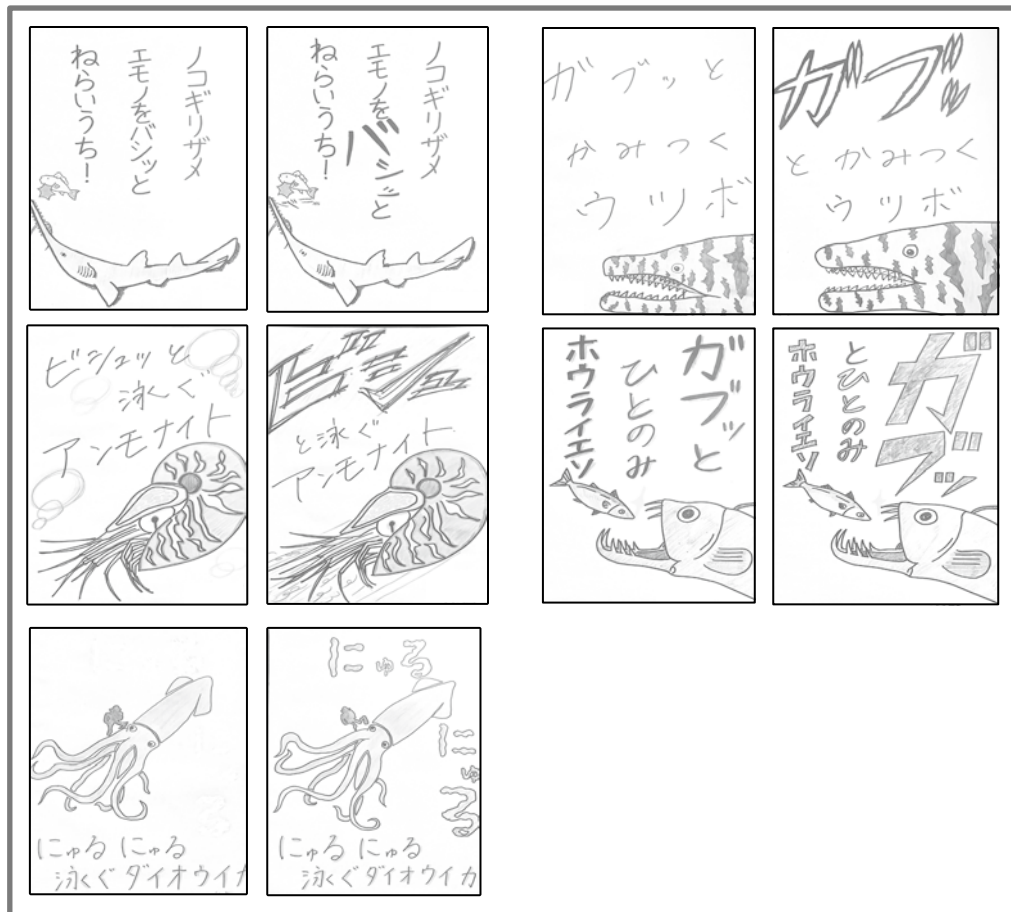


図1 即興表現をしやすい題材として評価が最も高かったイメージカルタ5種類（左側：A通常文字，右側：Bオノマトペ強調文字）

いて調査を実施した。formでは「A通常の文字」と「Bオノマトペ強調文字」のカルタをランダムに配列し、「とてもそう思う～全くそう思わない」の5件法を用いて、「Q：即興表現でイメージカルタを用いる際に、このカルタは表現しやすいと思いますか」という設問に対する解答を全対象者に求めた。なお、全対象者から本研究の分析対象になることに対して事前に同意を得ていた。

5. データ分析方法

①評価点の分析

「A通常の文字」と「Bオノマトペ強調文字」カルタの評価点について、得られたデータの平均値を算出した。統計処理は、IBM SPSS Statistics ver.26を用いて対応のあるt検定を行った。また、有意水準を5%未満と設定した。

②技能上位児童の文字の捉え方調査

技能上位児童6名は、C小学校の授業を担当した者と同クラスの担任が相談して抽出した。児童たちには、授業終了後に短時間残ってもらい、大学の授業で題材が動きに最もつながりやすいと評価の高かった五つの題材の「A通常の文字」と「Bオノマトペ強調文字」で描かれたカルタ計十枚をランダムに見せ、思いつくままに即興表現を行わせた。即興表現の様子はビデオに収録しておき、研究室に持ち帰って視聴し特徴をとらえた。なお、

五つの題材とは、「ノコギリザメエモノをバシッとねらいうち」、「ガブッとかみつくウツボ」、「ビシュッと泳ぐアンモナイト」、「ガブッとひとのみホウライエソ」、「にゅるにゅる泳ぐダイオウイカ」、であった（図1）。

Ⅲ 結果および考察

1 「表現のしやすさ」についての群間比較

「身体と表現Ⅱ」の受講生対象に、全44枚のカルタの「表現のしやすさ」について調査を行った。結果、「A通常の文字」は $3.99 (\pm 0.77)$ 、「Bオノマトペ強調文字」は $4.31 (\pm 0.72)$ 、 $t(5.39) = 9.25$ 、 $p = 0.00$ となり、「Bオノマトペ強調文字」の方が0.01%で有意に表現しやすいと捉える結果になった（図2）。しかし、小学第四学年に同様の調査を行った結果、「通常の文字」は $3.73 (\pm 1.22)$ 、「オノマトペ強調」は $3.74 (\pm 1.20)$ 、 $t(5.79) = 0.356$ 、 $p = 0.72$ となり、両者に有意な差は認められなかった（図3）。

次に、対象者を、①「身体と表現Ⅱ」の受講生、②小学校第四学年児童29名（③の選抜除く）、③同クラスの技能が高い選抜6名、の3群に分けた。そして、22種類の題材を描いたカルタの中で最も評価が高かった上位五種類のカルタの「表現のしやすさ」について、評価点を分析した（表2）。その結果、①では「A通常の文字」が $4.20 (\pm 0.61)$ 、「Bオノマトペ強調文字」が $4.65 (\pm 0.52)$ 、 $t(134) = 8.16$ 、 $p = 0.00$ となり、「Aオノマトペ強調文字」

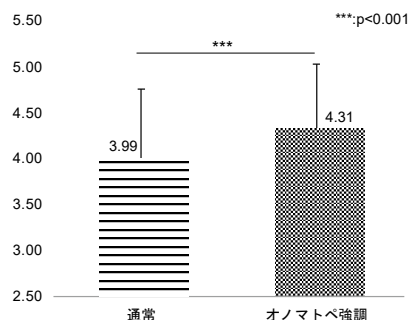


図2 「身体と動きⅡ」受講生の評価

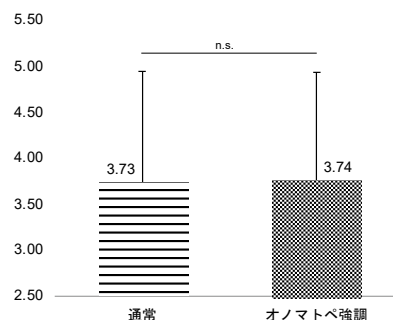


図3 小学第四学年の評価

表2 評価が高かった上位5種類のカルタの評価

①大学生	通常	オノマトベ強調	t値
平均値	4.20	4.65	-8.16 ***
標準偏差	0.61	0.52	
②小学生全員	通常	オノマトベ強調	t値
平均値	4.02	4.01	-0.36 n.s.
標準偏差	1.18	1.11	
③小学生（選抜）	通常	オノマトベ強調	t値
平均値	4.10	4.63	3.00 **
標準偏差	0.92	0.67	

の方が0.01%水準で有意に高い結果となった。また、③では、「A通常の文字」が4.10 (± 0.92), 「Bオノマトベ強調文字」が4.63 (± 0.67), $t(29) = 3.00$, $p = 0.005$ となり、1%水準で有意に「Bオノマトベ強調文字」の方が高い結果となった。しかし、②では「A通常の文字」が4.02 (± 1.18), 「Bオノマトベ強調文字」が4.01 (± 1.11), $t(144) = 0.206$, $p = 0.837$ となり、両者に有意な差は認められなかった。

以上より、題材の表現性を豊かに描いた文字である「Bオノマトベ強調文字」の「イメージカルタ」の方が、受講大学生や表現の技能の高い児童たちは「表現しやすい」と感じるようになった。しかし、表現運動を得意としない児童にとっては、これらの文字の描き方による違いを見取ることができず、彼らが「イメージカルタ」の持つ表現性を感じ取るためには、他の要因がある可能性が示唆された。

「イメージカルタ」を用いた即興表現では、それらをめくった途端、そこに描かれた世界観を瞬時に身体で表現する。今回の分析結果から、この“瞬時に思いつくまに”という要素が、表現運動や創造的な活動が得意な児童は面白いところであり、カルタに描かれた情報を正確に感じ取る技能があるのだろうと推察される。しかし、逆に苦手な児童たちは、カルタに描かれている文字の表現性を感じ取っていないことが明らかになり、今後別の視点を検討する必要性が見いだされた。

2 技能上位児童の「表現のしやすさ」の理由

技能上位児童には、「Q：即興表現でイメージカルタを用いる際に、このカルタは表現しやすいと思いますか」

に対して、五段階評価に加えその理由の自由記述を求めた(表3・図4)。結果、文字の描き方に関する理由が、「A通常の文字」では「文字が小さいからあんまり大きくやんない方が良い(原文ママ)」や「文字が小さかったからやさしくかむ感じでやってみた」といったものであった。一方、「Bオノマトベ強調文字」では「一番強調する場所の文字が大きくてわかりやすかった」「ニュルニュルというキーワードが目立っているから。」「さっきのとかわっていてガブッとかわらうライエソが目立っているから」といったものであった。ここから、技能上位児は、二種類の文字の描き方の差異について感じ取っている様子が明らかになった。しかし、注視しなければならないのは、「通常の文字」のカルタに対して「あまりニュルニュルしないんだとすぐにわかるから。」と書かれてあったり、「オノマトベ強調文字」のカルタに対して「パシッと書いてあるからどのくらい強かったのか分かったから。」と書かれてあったりしたように、オノマトベを強調した“文字の表現性”を言及しようとしていた児童もいた一方で、「文字が大きかったから」「小さかったから」といった“文字の大小”に着目していた児童が一定数存在したことである。擬音語・擬態語を表現した「オノマトベ強調文字」の描写の捉え方を、小学校四年児童の語彙力の中で説明することが難しかった可能性は大いに考えられるが、こちらからの質問の仕方に問題があったともとらえられる。ここから、“文字の表現性”の差異に着目するような質問の仕方を吟味する必要性が見いだされた。

また、文字ではなく、「絵がわかりやすかった」「絵が大きいから」「絵がとてもわかりやすくカブッと書き

表3 表現運動の技能上位の児童が書いた「表現しやすい」理由（太字と下線：文字の描き方に関する言及、★：絵についての言及）

カルタの題材	アンモナイト		ウツボ		ダイオウイカ		ノコギリザメ		ホウライエソ	
文字の描き方	通常の文字	オノマトベ強調文字	通常の文字	オノマトベ強調文字	通常の文字	オノマトベ強調文字	通常の文字	オノマトベ強調文字	通常の文字	オノマトベ強調文字
評価の理由	「 <u>ビシュツ</u> 」が <u>小さかつた</u> からどの程度でやればいいか迷った。	絵に後ろ向きに勢いよくビシュといきやすい。★	やはりさっきと同じで <u>文字が小さかつたから優しく噛む感じでやってみた。</u>	ウツボはかみつくし、たまに必殺技の体をうねうねさせるデスロールを知ってたから。	<u>小さく表現する「にゆるにゆる」</u> が、難しかった。	「にゆるにゆる」って感じがあんまりイメージがでなかった。	さっきのカードとは違って「 <u>バシツ</u> 」つとの <u>文字が小さいからあんまり大きくやんない方が良かった。</u>	のこぎりみたいな歯がイメージしやすい。	上顎より下顎のほうが長かったから特徴があってやりやすかった。★	やはりさっきと同じで <u>文字が大きかつたから大きさにやってみた。</u>
	弱めに動くから	丸まっている感じが難しいから	<u>もう1個のウツボと比べて弱めにするから</u>	手で口を表して動くから	<u>もう1個のダイオウイカに比べてニュルニュルしないから</u>	手をニュルニュル動かすから	<u>もう1個のノコギリザメと比べて弱めにやるから</u>	ノコギリの部分を手で表すのが簡単だったから	泳ぎながら急にがぶつていくから	ガブッと強いくから
	周りに水があるからなめらかということがわかるから。	<u>字が目立っているところ</u> と足の方に青い水が描いているから。	さっきのと変わっているのがわかりづらいから。	絵がとて <u>わかりやすくてカブツと書いてあるから。</u> ★	<u>あまりニュルニュルしないんだなとすぐにわかるから。</u>	<u>ニュルニュルというキーワードが目立っているから。</u>	さっきのカードと少し変わっているのがわかりにくいから	<u>バシツと書いてあるからどのくらい強かつたのか分かったから。</u>	大きく口を開けているところがわかりやすい	さっきのとかわっていて <u>ガブツとかホウライエソが目立っているから。</u>
	全体的に、 <u>文字が大きいから。</u>	<u>文字が大きくて、一言だから</u>	全体的に、 <u>文字が大きいから。</u>	<u>文字が大きくて、一言だから</u>	絵が大きいから。★	<u>一番強調する場所の文字が大きくて分かりやすかつた。</u>	絵が分かりやすかつた。★	絵が分かりやすかつた。	全体的に、 <u>文字が大きくて強調する場所の字が大きいから。</u>	<u>強調する場所の字がスゴイ大きいから。</u>

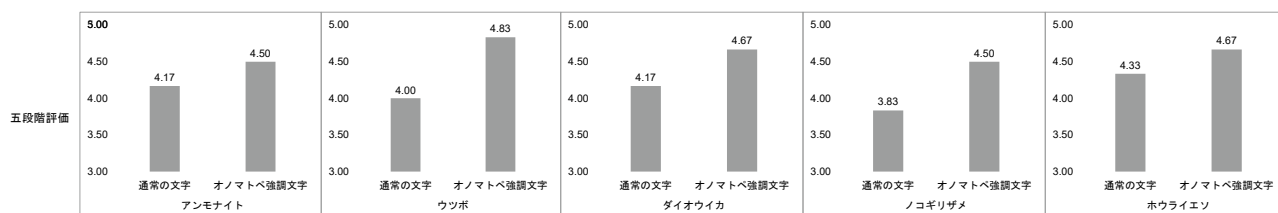


図4 各カルタの評価点

であるから。」といったように、「絵の描き方」について着目していた児童も少なくなかった（表中の★）。この結果は、児童たちが「イメージカルタ」を観るときに、まず「絵の描き方」に着目している可能性も示唆される。この点も、今後の課題として残された。

6名の児童の即興表現は、どの題材も興味深かった。アンモナイトでは、手の指先を触手に見立ててゆっくりと柔らかくヒラヒラさせ、その後素早く立ち上がって両腕を閉じる速さの変化も見られた（写真1）。ダイオウイカは、胴体を起点にして肩や腕、指先まで柔らかく波打たせ、速くしたり遅くしたりとスピードを変化させな

がらあちこちの空間へと移動していった（写真2）。ホウライエソは、動きとしてはウツボに類似していたが、腕を大きく開いて一気に閉じる動きで、より尖っている下顎の開閉を表現するのが特徴的であった（写真3）。「オノマトベ強調文字」を見せたときの方が、動きがより大きくなる児童もいたが「通常の文字」を見せたときと全く変わらない児童もいた。これらの結果から、「文字の描き方」は、「表現のしやすさ」という認識レベルには影響を与えうるが、表出するパフォーマンスとしての表現の差異にまでは影響を与えなかったことが示唆された。



※児童の表現は ← の方に進行している

写真1 「ビシュッと泳ぐアンモナイト」(手の指先で柔らかい触手を表現しシュッと素早く立ち上がる)



写真2 「にゆるにゆる泳ぐダイオウイカ」(腕や肩を柔らかく波打たせ空間を楕円に移動している)



写真3 「ガブッとひとのみほうライオン」(腕を鋭く前に出し大きく振りかぶって閉じる、方向は多様)

IV 摘 要

〈謝 辞〉

本研究では、C大学教育学部の選択必修科目である「身体と動きⅡ(令和3年10月5日～11月16日)」の前半7回を履修した受講生(三年次28名)と、令和4年3月3日・11日に「表現運動」の授業を実施したC小学校第四学年の一クラスの児童(35名)を対象に、「A通常の文字」と「Bオノマトペ強調文字」の二種類のイメージカルタを用いて検証授業を実施した。そして、全ての実践終了後に、どちらの方がより「表現しやすい」と考えるかについて調査を行った。結果、大学生と表現運動の技能の高い児童は、「Bオノマトペ強調文字」の誇張した文字の表現性を読み取ることができた。しかし、技能の中位・下位の児童はそれらを見取ることができなかった。また、自由記述の分析から、技能上位の児童は、文字の大きさや絵の描き方に着目している可能性も示唆された。

本研究では、これらの原因を確認するに足るデータを収集できなかったが、「イメージカルタ」の色使いや文字情報の量・内容などが表現性に影響を与える可能性も考えられる。技能中位や下位の児童は、なぜ文字の描き方の違いを見取れないのか、またどのような情報が「イメージカルタ」に描かれていた方が「表現しやすいか」、また、より豊かな技能発揮につながっていくのかに関しては、継続研究が必要だと考える。

〈脚 注〉

- 1)「オノマトペ強調文字」は、本研究において筆者が独自に名付けたものである。

本研究を遂行するに当たり、C小学校の授業者と児童たち、C大学の受講生たちには多くの協力を頂きました。ここに、心からの感謝の意を表します。

〈引用参考文献〉

- 遠藤和也・加納政芳・中村剛士(2018)オノマトペによる手書き文字変更手法. 知能と情報. 30(5). pp. 773-778
- 吉川政夫(2013)運動のコツを伝えるスポーツオノマトペ. バイオメカニズム学会誌. 37(4) pp. 215-220
- 村田芳子(1987)表現運動. 小学校新しい体育の考え方・進め方(宇土正彦編). 大修館書店:東京
- 森本早智(2017)オノマトペを利用した視覚表現についての研究. 日本デザイン学会研究発表大会概要集 64(0), pp. 492-493
- 文部科学省(2019)小学校学習指導要領解説体育編
- 中里理子(2005)教科書教材に見るオノマトペ. 特徴の整理とそれを踏まえた読解指導との関連を目指して. 上越教育第学研究紀要25(1). pp. 1-14
- 寺山由美(2011)表現・創作ダンスの学習における「即興表現」の指導とその捉え方—実践を続けてきた4人の教諭に着目して—. 日本女子体育連盟学術研究27. pp. 21-38
- 畠木真由美(2009)ジャングル探検—カルタを使って—. 女子体育51(7・8) pp. 34-35